

# 道命阿闍梨の伝記的考察

田 中 新 一

はしがき

平安朝中期、高級貴族藤原道綱の子として生まれ、歌人としてかなりの評価を受け、好色僧という伝説的人物にまでなっており、その名を得ながら、現実にはどんな人生を生きたのか、余りよく分かっていない人物、道命阿闍梨の伝記上の問題点の若干を採り上げて、その人物像<sup>(1)</sup>解明の一資<sup>(1)</sup>として思う。

なお、その際、本誌前号で概括的な整理考察を試みた、「道命集」中心の道命和歌資料も、つとめて利用するつもりである。

まずは、かつて岡一男氏がその著『道綱母』で投げかけられた道命出生時の問題から出発したいと思う。

## 一 問題点(1) 出生について

出生は天延二年(九七四)。このことは九条家本「小右記」目錄・十六・臨時六・僧侶入滅事の寛仁四年七月四日四十七歳逝去の記録などより逆算して分かる。父は藤原道綱。従って、父方の祖父は兼家、祖母は「かげろふ日記」作者たる倫寧女である。

る。

「かげろふ日記」下巻は天延二年の大晦日までの記録であり、この年出生の道命のことは当然書かれていいはず。しかも、道綱の長男道命は、道綱母にしてみれば大事な初孫。ところが不思議なことにその誕生について一言半句の筆も費していない。

「作者がわざと書かなかったと思われる重大な事実がある」として、岡一男氏は、この道命出生の一件を取り上げて、注意を喚起された<sup>(2)</sup>。

確かに重要な指摘であった。作者倫寧女のライバル近江が子を産んだ(後述)という風聞までも書き付けていて、「なほあらむよりはあな憎とも聞き思ふべけれどつれなうである」<sup>(3)</sup>というのに、である。そんなことよりはるかに大事なはずの道綱の長男の誕生をなぜ書かなかったのだろう。

この点につき、上村悦子氏は「この日記の主題へかげろふの如きはかない苦悩多き身の上の告白」と全く無縁むしろ抵触する素材であったからであろうか。それとも道綱や養女——二人とも兼家の実子である点、兼家との夫婦生活を記した日記には

が、それにしても、である。日記の主題と深く結ぶことなく

また自分の生活圏と直接かかわりをも持たぬ大和だつ女や八橋の女のことを書きながら、なぜ、初孫道命を産んだ女のことを筆にのびせなかつたのだろう。疑問は依然として氷解しない。そして、不可解な点は、この一事に留まらない。以下に挙げるようないくつかの疑点をも合わせて問題にしなければならぬように思う。

なお、この出生問題の焦点は、道命自身より、母方即ち道命を産んだ母なる女性であるはもちろんだが、道命の母の伝については一層不透明である。「尊卑分脈」道命の項には「母中宮少進近広女」とあり、「中古歌仙三十六人伝」には「母中宮少進源広女郎家女房」とある。上村氏によると、書陵部蔵鷹司城南館旧蔵本新古今和歌集の作者の注には「母中宮大夫從五位下源広子カ家女房」とあるという。<sup>(5)</sup> 道命の母は中宮少進源広女と考えてよさそうである。「家女房」を岡氏は「兼家の本邸の侍女」と推測された。

源広は、嵯峨帝皇子源明（出家法名素然、横川宰相入道と号す）から数えて五代の裔に当る。道命が十七歳で横川妙香院の七禅師になつた（門葉記・後述）ことも、あるいはこの素然以降の系累縁によるものかも知れない。ところで、尊卑分脈系図の

によると、広は二名見える。

嵯峨天皇—源明—舒—善—  
勸 義  
広 広  
大藏丞 從五下大藏少甫

これにつき、上村氏は「権記」長保六年正月五日「源広、藤原信頼……叙從五位下」とあるところから、義の息子の方だろうと言われたが、あるいは、また、この二人は同一人で、事情あつて勸の子が義の養子（猶子）になつた可能性もあろう。とすれば、中宮少進・大藏丞・同少輔・中宮大夫などを歴任した人物ということにならう。この人の娘が道命の母であり、兼家邸に出仕する内に、道綱の目にとまつたのであろうか。

この道命の母方で、文学的に名のあった人としては、広の祖父善がいて、後撰集歌人であった。入集の四首はいずれも女との贈答歌で、風騷の人であった。道命の歌才には、父方の倫寧女（道綱母）の資質の流れが常識的には考えられるべきだろうが、母方の源善の流れも若干は考慮されていいかも知れない。ただしその直系卑族に勅撰歌人は見えない。

二 問題店(2) 出家について

幼少期、道命は、叡山の天台座主慈惠大僧正の弟子になったと伝えられる。すなわち「元亨釈書」十九に、「釈道命、藤原相道綱第一之男也。少登叡山、事慈慧」とある。が、三保サト子氏の指摘されたように、その入山は永延元年（九八七）と考え

るべきである。なぜなら、「門葉記」寺院三の帖に所収の、永祚二年二月十四日付太政官牒、「延暦寺 応以妙香院為御願補院司供僧並置年分度者事」の条に、七禪師の一人として、

伝燈大法師位道命年十七 歳三

とあるからである。「萌」は僧侶の出家後の年数なので、「萌三」で逆算すれば、その出家入山は永延元年で、十四歳に当る。慈恵大師（良源）はその前々年の寛和元年（永観三年）正月三日入寂していた。

さて、永延元年の出家入山ということになると、道命の個人的閱歴や社交的狀況から、まず最も関わりがあらうと推測されることとして、その前年まで近侍していた花山帝の退位・落飾・出家という大事件が浮かび上がってくる。道命入山の前年、寛和二年六月に受戒し入山された花山院、追隨して出家したその寵臣藤原義懷・同惟成らの動静と恐らく無縁ではなかうと想定される。

道命が年少時より花山帝に近侍していたことは、その家集に検証できる。

花山院、歌合せさせ給しに、題あまたまはせたりし、七夕庚申にあたりたりしに

34 まちえたるやどやなからんたなばたはこよひは人のねぬよとか聞く

35 君がよのはてしなればたなばたのあひ見むほどの数ぞしられぬ

この事例につき、七夕庚申が詠歌年時に関わるとみなし得るなら、七夕庚申に当る年が永観元年（九八三）以外にはないこと、つとに今井源衛氏の指摘されたところである。その年、花山院は十六歳で、即位の前年に当り、道命はまだ十歳の年少に過ぎなかった。

このように幼少期より近侍した花山院の出家を追う形となつたとおぼしき道命の入山には、院の腹心爪牙ともいふべき義懷・惟成の出家と同じ臣従の趣を窺わせるに十分なものがある。なぜなら、花山院に対する道命の近侍敬愛の思いは、十歳の若年時に留まらず、三十前後の中年期から、やがて院の没後（寛弘五年二月八日以降・道命三十五歳以降）にまで及び、その歌は家集にいくらかも見出すことができる。そこには極めて深い結びつきを読みとることが可能である。花山院の出家に誘発された道命の出家入山を推測することは決して無理なことではない。

とすれば、そのことは、花山院出家に当って、祖父兼家・父道綱が果たした役割とどういう関係にあるのだろう。衆知のように、寛和二年六月二十二日の花山帝の退位には、兼家一門による政変の色合いが濃い。そしてその陰謀に道綱も加担していたことは、すでに萩谷朴氏や今井氏らの説かれたところである。<sup>10</sup> その花山帝のあとを追って道綱の息道命が出家したとすれば、これはまたどう解釈すべきことか。その年、道命は十四歳、たとえ父道綱の行動の秘義までは諒解せずとも、院に臣従し出家

入山にまで踏み切れる、心的状況とは、どんな状況なのだろうか。

### 三 問題点(3) 近江・綏子のこと

藤原綏子は、兼家の娘で、三条帝女御になった人である。道綱とは腹違いの兄妹という関係になる。「栄花物語」<sup>11</sup>様々の悦びの巻によると、綏子の母は「対の御方」と呼ばれ、「いと色めかしう、世のたはれ人（ミダラナ女）」に言ひ思はれ給へるに」とある藤原国章女で、大鏡裏書の記述により逆算すると、天延二年に綏子を産んだことになるが、かつて、坂口玄章氏は、この母こそ「かげろふ日記」<sup>13</sup>の同じ天延二年十月に子を産んだ近江であろうと推定した。兼家の子女で、天延二年出生児に二人はいない点や、「栄花物語」での対の御方は道隆とも通じて娘を産んだとあって「色めく女」という点でも近江と共通していて、同一人の可能性が強い。この説は、その後、喜多義勇氏（日本古典全書『蜻蛉日記』を始め、岡氏（『道綱母』・柿本葵氏（『蜻蛉日記全注釈』・松村博司氏（『栄花物語全注釈』）などに広く引き継がれて通説になっている。なぜ「近江」と呼ばれるか不明といわれているが、国章の近親者に近江守歴任者がいるからだろう。<sup>14</sup>この事がまた坂口説を強化することになる。

さて、以上の線上で考える時、「道命阿闍梨集」(124 125—220 221 二モ重出)で、道命がこの対の御方（近江）の為に歌の代作をしたというのはいかにも面白い。即ち、尚侍綏子逝去の寛弘元年二月、右大臣（顕光Ⅱ兼通ノ子）が尚侍綏子の母（対の御方）

に送った弔問歌

君もなき宿に匂へる桜ゆへ花の姿を思ひいづらん  
に對し、道命は、尚侍の母近江に代って、

なき人の形見と思ふ花にさへちり遅れぬる身をいかにせむと詠んだ。道綱の子道命が、道綱の母（道命にとっては祖母）の最も憎んだ近江の為に代作をしたというのである。道綱母が在世中だったら目をむいたに違いない。<sup>15</sup>

道命が恋文の代作をした話は家集にも見えている。人に代って歌をよむことなどは、彼の世評からすれば異とするに足りないことだろう。だが、近江の場合はわけが違う。右の代作歌の「なき人」とは兼家であり、その兼家に先立たれ、今またその「形見」の遺子綏子に死なれた近江の悲しみを体して詠み出したこの歌とは、道綱母の側からみれば、夫兼家の愛を奪いとして自分を苦しめた女とその娘への肩入れということになる。「憎しと思ふところ」<sup>16</sup>（天延三年二月二十五日）「憎どころ」<sup>17</sup>（天延元年二月五日）「忌みのところ」<sup>18</sup>（天延二年十月）等の道綱母の怨言を思うと、その直系の孫道命のこの代作行為はどう受け取ったらよいのだろう。父の妹に当る綏子の死に際し、道命が服喪することは当然あつてしかるべきだが、この代作行為は異とするに足るといわねばならぬ。

付言すれば、坂口氏は近江と国章女との同一人説の根拠の一つとして「共に色好み」という点を挙げている。その近江の産んだ綏子も、また母の好色の資性を受けたものか、「大鏡」兼家伝並びに裏書は、綏子が三条帝（当時東宮）の寵を受けながら

も、長徳年中、源頼定と通じて懷妊し、道長の容赦のない実地検分を受けた逸話を伝えている。この近江・綏子の母娘兩人に関わりを持ったとする上述の道命の代作行為には、三者に共有の資性の暗合がうかがえて興味を引くが、この三者の道綱母との距離は余りにも遠いといえる。道命の好色については今更云々するまでもないだろう。

#### 四 問題点(4) 三条院私淑のこと

綏子の入内した三条院と道命との関わりも注目される。「采花物語」巻十三「ゆふしで」では、寛仁元年五月の三条院崩御に伴う服喪中のことにつき、次のように書かれている。

いみじうあはれに悲し。さべき殿ばら・殿上人など皆あはれなるまに、歌ども詠みたれど書きも留めず。道命阿闍梨のばかりは人書き留めたりける。

あしひきの山ほととぎすこの頃は我が鳴く音をや鳴き渡るらん

とぞありける。

この歌は、道命の家集にはないが、「新拾遺集」巻十哀傷に収められている。三条院縁故の人々の歌がなぜ書き留められなかったのか、定かでないが、道命の追悼歌だけはこうして書き残された。

次いで同年八月の三条院遺子敦明親王の東宮退位事件や、敦明小一条院の高松殿寛子との婚儀とそれに伴う敦明妃延子（堀

川女御）父顯光の悲嘆などの三条院秘話を挟んで、巻十四「あさみどり」では、翌寛仁二年の道長三女威子入内の晴儀と、その陰に人々の記憶から薄れ行く三条院追慕の方々の消息を語っている。そこで道命の歌が再度披露される。

三月廿日の程に、一条の宮（＝研子御在所）に桜を参らせ  
て、道命阿闍梨、

いかならん聞かばや死出の山桜思ひこそやれ君がゆかり  
に

とあれば、中将の乳母（＝禎子ノ乳母）御返し、

君ゆゑに悲しき今朝の句かないかなる春か花を折りけん  
今是一条宮に移り住んでいる三条院遺族の研子・禎子を弔い、  
院追慕の心を見せたものである。「君」とは故三条院のこと。「死  
出の山桜」とはいかにも道命らしい無造作な詠み口であること、  
松村博司氏の指摘された通りである。

このように、道命の三条院への思い入れは深い。花山院に對する思いと同類である。寛弘五年（一〇〇八）の花山院薨去後の院追懷の歌は家集に数多く見られるが、代表例を挙げると、  
（五月）六日、花山院の人に、いかに思ひ出づること多から  
んなど、あはれなることかきて、はしに、

あやめ草生ふるところは世の中のうきなりけりときふ  
知りにき

三条院追慕の心と同趣である。注目されるのは、花山院・三条院の崩御の中間期に世を去った一条院（寛弘八年）について

は、「栄花」にも「家集」にも、道命の挽歌哀悼歌類を一切見出すことが出来ない。これはどうしたことか。道命から見れば、三条院（母超子）も一条院（母詮子）も、ともに兼家の孫に当るといふ点で、自分と等距離にある御方々だが、こういう差異を見ると、道命の三条院に対する心寄せは、花山院（三条院の異母兄）に対する親近感の線上で考えるのが穩当のようである。冷泉帝遺子として政治的薄幸のうちに分離し、風流を志向した花山・三条両帝に私淑した道命ということになろうか。これも撰閑家側の一員として動いた父道綱からはかなり遠い振舞いといわねばならぬ。

## 五 道命像素描案

以上のような道命についてのいくつかの不可解なありようを明確に解明し得るような資料は、残念ながら我々に残されていない。貴顕の筋だけでもつと残されているはずの父方資料、すなわち道綱や道綱母の道命との関係を示唆する資料さえほとんど見当らない。管見の及ぶところは、前掲永観元年とおぼしき花山院歌合と、寛弘六年とおぼしき道綱家歌合との二個所のみである。

前者に関しているならば、その道命の歌（前掲）が、十歳の少年の作とも思えぬとみて、今井氏の想定されるように祖母道綱母の代作も考えられぬことはないが、他方、道命の母方の誰かの力添えだつて考えられぬものでもあるまい。また思うに、

十歳の子には詠めぬと当初から分かつていて題が与えられるものだろうか。詠める児という認識があつて、院は道命を加えたのではないか。誰かの推敲はあつたにせよ、道命の早熟の才を認めなければならぬかも知れない。道綱母が実際に道命のための代作をしたという事例が他にあればともかく、少なくともこの一例のみでは、道綱母の代作をあえて主張することはできないだろう。また、仮にそうだとしても、そこによめるものは道綱母側からの一方的意志であつて、道命の側からの父方に関わる主體的意志などはとてもよめそうにない。

とすると後者だけである。「道命阿闍梨集」（96～100）には次の記述が見える。

或所に歌合するに、神祭と云題を

96をとめこがをふるをよりもろのもろ声は行く末遠き人も聞くらん

千鳥

97夜半にくる人もあるかといでみよまへの川べに千鳥なくなり

おなじ

98千鳥なく浦べはゆきもやられぬをいかなる波の立ち返るらん  
99玉の緒の乱れたるかとみえつるはたもにかかるあられなり

けり

又これは右のかたに

100敷妙に高嶺の雪やとけぬらんみぎはまされる山川の水  
この歌合歌を、萩谷朴氏は『平安朝歌合大成』において、千

載集卷六の「傳大納言道綱の家の歌合に、千鳥を」と題する藤原長能の歌や、桂宮本長能集の「いつれの年にか、侍殿歌合に」と題しての「千鳥」「氷」「雪」「月」などの題詠歌と同じ時の歌合歌と判定し、<sup>(20)</sup>「寛弘四―七年」冬傳大納言道綱歌合の項を立てられた。この年次については「道命集」の検討からさらに寛弘六年冬と限定できようことを前稿で述べた。<sup>(21)</sup>

この歌合は道命三十六歳の折のものだが、道命はこれをあえて「ある所に」と秘めての書きぶりをみせている点が注目される。出詠者も道命の叔父長能が知れるのみである。長能は「侍殿歌合に」と明示している。道綱の近辺のものたちの私的な催しであつたのだろうか。なのに、道命には「ある所に」なのである。「道命集」には、また、これと同じ歌合を指すとみられる歌一首(293)が「あるところに、月を」として在る。ここでも「あるところ」と実名はでない。)。

加えて上掲歌100の詞書「又これは右のかたに」とある所をみると、左方右方双方に読み出しているものとみられ、道命は歌作こそすれ、方人として列座したものでもないようである。

上述のこと以外に、道綱らと道命をつなぐ糸はほとんど手繰れない。これを推すと、どうしても祖母とも父ともひどく疎遠な道命という像が浮かんでくる。

こんな点も勘案して、前記のいくつかの問題点につき憶測をたくましくしてみると――、

道命は道綱と源広女との間の子として天延二年生まれたが、

道綱母はこの事実を当座は知らなかったのかも知れない。あるいは知っていても、なんらかの事情(例えば東三条家女房という身分など)でその女を視野に入れず、当初は無視乃至軽視していたのかも知れぬ。その後、十歳のころ、花山院歌合に出詠の機を得て(道綱母が老婆心から孫道命のために代作して後押した可能性も一説としては認められてよい)道命の花山院入は恐らくこのころより始まったと思われる。風雅の体質的類似もあつてか、次第に院の信任を得るが、三年後の院の退位出家事件にはからずも父道綱が関わっていることを察知してか、または少年時のひたすらな情動に促されてか、世をはかなみ院のあとを追って、その翌年(十四歳)、出家入山したものであろうか。(こうなってみれば、一層のこと、従前より薄縁の祖母・道綱母とは断絶または疎遠の間柄になってしまうであろうから道命の歌に彼女の影響を見出すことの困難さは容易に予測されよう。)その後は、花山院の風流生活に歩調を合わせるように、僧俗の間に生き永らえ、心情的には、花山・三条の冷泉流の不運反俗の御方々に私淑し、政界に卑屈になずむ父道綱とも深く関わることもなく、独自の風流三昧の入道生活を続けて行ったものと思われる。(前述の「対の御方」の為の代作行為も、こうしてみると三条女御としての、綏子を悼む心情行為とも理解されよう。)

「道命集」は如上の推測のこよいな傍証となつてゐる。以下、この傾向を彼の家集に検証してみようと思つた。

## 六 家集に見る道命の交友

「道命集」に見る道命の社交関係について一瞥を加えるならば、伺候した花山院及びその近侍の人々との交際や、幾度か見える各種歌会所属歌人群との接触の事例を除くと、個人的な交際相手としては、綏子の母以外には、あつのお・定頼・やすまさ・なをたかなどがいる。それらは一体どういふ人物だったのか。

◇あつのおは藤原敦信で、『歌合大成』によると、天延三年三月十日、一条中納言為光歌合に義懷・惟成・元輔・長能らとともに加わり、また具体的な四季題と人事題を加えて歌題の形式的完成を遂げたといわれる寛和二年六月十日内裏歌合（花山天皇主催）にも義懷・惟成・能宣・実方・好忠・公任・高遠・長能らと列席し、所謂花山院グループの一角をなしていたが、その後、長保五年五月十五日左大臣道長歌合にも公任・長能・為時・為憲らとともに加わった文人である。まぎれもない花山院派歌人であるとみてよからう。「集」では鞍馬参籠の折の贈答歌などが見える（24・25）。

◇定頼については、次のような記事がある。

やはたの臨時祭のかへさの日、夜ふけにければ、定頼の少将の送りしける、車にかうぶり落したりける、又の日やるとて、人の

106 かくれたるまことやありしちはやぶる神もあはれになりけるかな

かへし

107 百敷のこのへの宮とすぎまにかざしの花も散りにけるかな  
このやりとりのあつた年時はほぼ推定がつく。藤原公任の息定頼が少将であったのは、「公卿補任」によると、寛弘六年（一〇〇九）正月二十八日右少将に任じて以降、長和三年（一〇一四）正月二十七日右中弁に転ずるまでの間である。そしてこの歌は家集の歌順位置から寛弘六年又は七年のことと推定される。<sup>(23)</sup>さらに、八幡の臨時の祭とあるところより、三月中旬のことと知れる。この年、道命は三十六・七歳、定頼は十八・九歳に当る。一方、「定頼集」の中にも、道命との交際を示す贈答が二箇所（112、119、120、寛仁年間のことか）見え、長期にわたり親しい関係をとおり結んでいたことが察せられる。定頼は道命より十八歳の年少であるが、おそらくは父公任（道命より八歳上）を媒としての交誼であろう。

公任と道命の交際関係を実証する資料は乏しいが、ともに花山院東宮時代の近臣としてあり、花山院歌壇を舞台に斯道の先達公任に親近傾斜した道命を推測することは容易である。例えば、「道命集」に、

九月ふたつありしとの、のちの九月に、秋過ぎて秋ありといふ題を人々よみにしに

229 忘れてもあるべきものをなかなか思ひを残す秋にもあるか



な

と詠んだが、それは、「公任集」(334)にある

大殿、石山にこもり給ひて、題どももて歌合し給ひけるに、題をよみてありけるに、

かげすくなきよひの月

忘れてもあるべきものをなかなか雲間すくなき月をこそ思へ

の upper 句を借用したものである。因みにこの公任歌は、萩谷氏によれば、永延元―三年五月の太政大臣頼忠石山寺歌合と推定されている。公任に私淑する道命の一面をうつし出している。

◇「道命集」に見える

やすまさ、来たるに

237 ふた葉なる野べの小松をひきつれて今日このもとによろづよはきぬ

の「やすまさ」は藤原保昌であらう。子連れで訪れて来た保昌に対し、道命は頌賀の心を寄せたものであらうか。この歌は寛弘二年の歌と推定されるので、和泉式部との関係の出来る以前の保昌と思われる。時に道命は三十二歳。

他方、道命と親交のある上記定頼の家集(72)には、

式部が、保昌が妻になりて、丹後になりたるに、いきやせまし、いかがせましといふと聞きて、やり給ひける

ゆきゆかず聞かまほしきをいづかたにふみさだむらんあしからの山

とある。式部が保昌の妻として丹後下向時に見せた逡巡に対して、定頼がその底意を打診した歌とよめる。定頼と式部との関わりは公任を介しての従前からのものであらう。

道命と保昌、定頼と式部、この二組の交際に橋をかけるものとして、前述の道命と定頼(公任を含む)の親交が考えられようか。保昌が式部を妻にした経緯(その結婚は寛弘七年<sup>25</sup>)は不明といわざるを得ぬが、彰子中宮に出仕した式部に道長の家司保昌が直接言いかけた可能性は考えられるものの、資料的に保昌と式部とを結び付け得る人脈の糸は、保昌と道命、道命と定頼、定頼と式部(及び小式部)の三本の繋ぎ合わせといつてよいだろう。<sup>26</sup>

◇次いで「なをたか」については、「道命集」(145・146)に次の応答が見える。

山寺に侍しに、なをたか、もとより、四月つごもりがたに、かくいひたりし

ここにわが聞かまくほしきあしびきの山ほととぎすいかに鳴くらん

返事

あしびきの山ほととぎすのみならずおほそ鳥の声も聞こえず

右詞書中の「なをたか、」の部分は、三保氏の校合によると、書陵部蔵別本「道命法師集」には「なをた<sup>イタカ</sup>、」とある。ここは別本本文に近く「なをた、か」であつたと見るべきである。何

故なら、後拾遺集第三夏に、

道命法師山でらに侍けるにつかはしける

藤原尚忠

ここにわが聞かまほしきをあしびきの山ほととぎすいかに鳴くらん

かへし

道命法師

あしびきの……

とあるからである。

尚忠は、萩谷氏が正暦年間と推定された「花山法皇東院歌合」(十卷本所収)に、

卯花

左

直忠

妹が家路道たそかれになるときは垣根の花をたづねてぞゆくなど歌三首を残している。原態は「なほた、ミセケチ直忠」とあり、「なほた、」は萩谷氏の指摘された藤原吉信の男、尚忠であらう。この「東院歌合」は、花山院を始め、戒秀法師(清少納言の兄)・弾正宮上(九の御方・伊尹女・花山法皇生母懷子の妹)・正光(兼通六男・懷子の従弟)・成信(花山法皇叔父義懷の男成房の前称)など、花山院の側近で行われたものであるだけに、この「なほた、」は、同じく花山院に近い道命と応和する尚忠ということになろう。ここにも花山院に結ばれる道命の人脈の糸を確認できる。

こうして家集に登場する人物は、何らかの点で花山院乃至花山院側近に結びつく人々ばかりである事が分かる。

## 結び

こうしてみると、道命は、兼家の孫、道綱の子として生をうけながら、幼くより父道綱らに疎く、反道綱とまでは言い得ぬにせよ、非道綱家的人物として生き続けた形跡が色濃い。

赤染衛門は、自らの家集に次の歌を遺している。

道命あざりなくなりて後、法輪にまうでたりしに、住みし坊の桜の咲きたりしを見て

誰みよと猶句ふらんさくら花散るを惜しみし人もなきよに能読の天王寺別当だ、当代指折りの歌人だ、希代の色好みだと、とかく賑やかな評価のついて回る道命だが、冷泉系王政(花山・三条)衰微の蔭に、彼の晩年の法輪寺生活では、桜の老木一もとばかりが心の友としてあったのではないか。寛仁四年(一〇二〇)七月四日、四十七歳でこの世を去った。同年十月十五日、疎遠の父道綱は、その後を追うように六十六年の生涯を閉じる。

## 注

1 拙稿「道命阿闍梨の和歌資料についての考察」(『国語国文学報』41集、昭59・3)

2 『道綱母』(有精堂、昭45)

3 日本古典文学全集『蜻蛉日記』(木村正中・伊牟田経久氏校注、小学館、昭48)三八五頁

4 『蜻蛉日記の研究』（明治書院、昭47）三六六頁

5 同上三六五頁

6 同上

7 『道命阿闍梨集』（和泉書院、昭55）解説六頁

8 『大正新修大藏經』にはこの部分欠。今、『大日本史料』第二編之一（五三一頁）による。

9 『花山院の生涯』（桜楓社、昭43）一六八頁

10 荻谷朴氏『平安朝歌合大成二』（昭33）六〇九頁、今井源衛

氏注9著九二頁〜九四頁

11 以下に引く『栄花物語』本文は松村博司氏『栄花物語全注

釈』（角川書店刊）による。

12 尚侍綏子事、東三条入道摂政三女 母皇后宮大夫藤原国章

卿女 永延元年九月任之入三条院東宮時 長徳年中通于源宰相

頼定卿 寛弘元年二月七日薨年卅一

13 「蜻蛉日記人物考」（『国語と国文学』9巻6号、昭7・6）

14 長良 基経 清経 元名 文範 国章 知章 女（綏子母）

近江守歴任 参議 近江守歴任

15 例えば『家集』238・273・296・297など。

16 「御堂関白記」寛弘元・二・十三の条に「問尚侍母。着服。

小将同。」とあって、道命と同縁の立場に立つ頼通（小将）も、

父道長とともに着服したことが分かる。

17 日本古典文学大系『大鏡』（松村博司氏校注、岩波書店、昭

35）一七一頁、及び上掲注12

18 『栄花物語全注釈三』四九九頁

19 上掲注9書一七二頁。

20 『平安朝歌合大成三』七四一頁、及び『大成五』資料増補

一三二〇頁。

21 上掲注1稿。

22 第五句の欠は谷山本（『私家集大成中古I』所収「道命集」

解題——稻賀敬二氏執筆）により補う。

23 上掲注1稿参照。

24 上掲注9書一六七頁〜一七一頁。

25 山中裕氏『和泉式部』（吉川弘文館、昭59）一七三頁。

26 道命と和泉式部の諸説話の源泉は案外こんなつながりの類

に關わっているのではないかと思う。

27 上掲注7書二六頁。

28 ただし、今井氏は「吉」の草体を「直」に誤ったものと見、

吉忠即ち好忠であろうとの説を出されている。（注9書一八四

頁）

### 〔補記〕

前号「道命阿闍梨の和歌資料についての考察」で挙げた道命

の和歌に、次の一首を追加する。

春はさは花より外のことやなきのべのかすみのたちもこそ

きけ（神原家本「赤染衛門集」406）